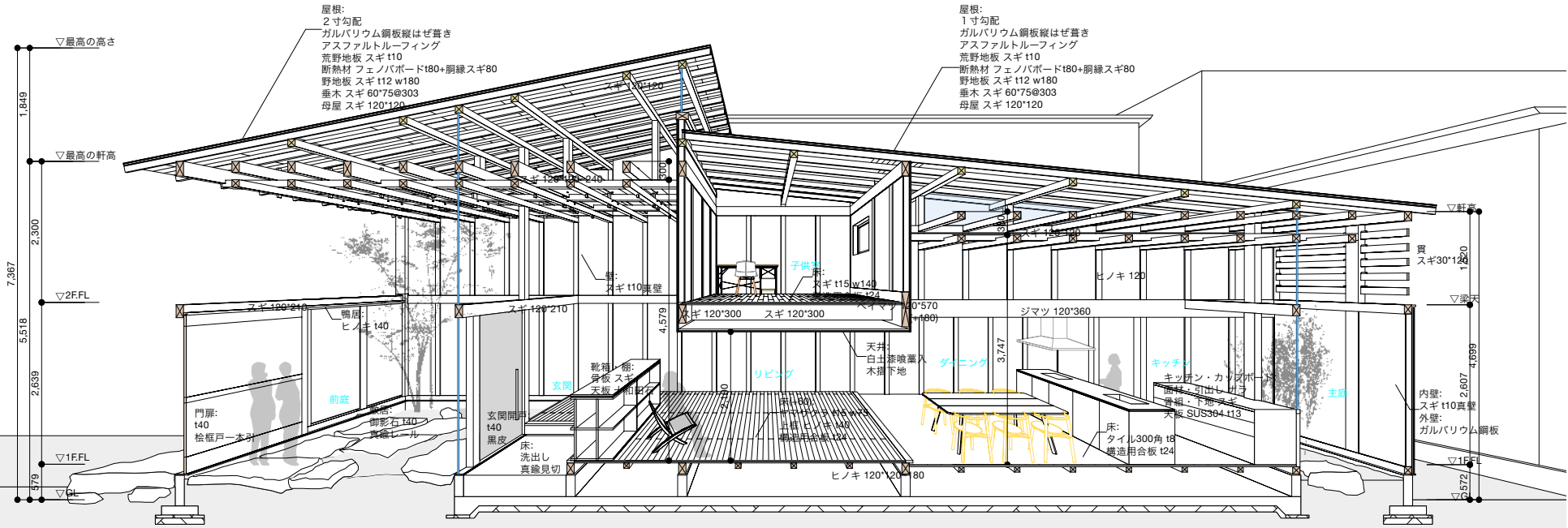


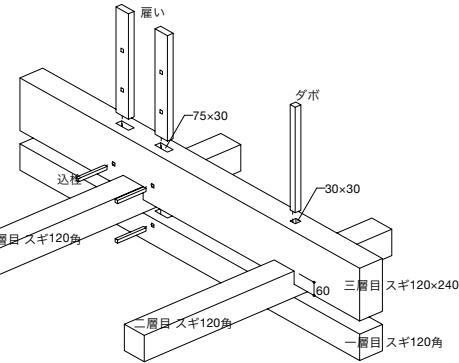
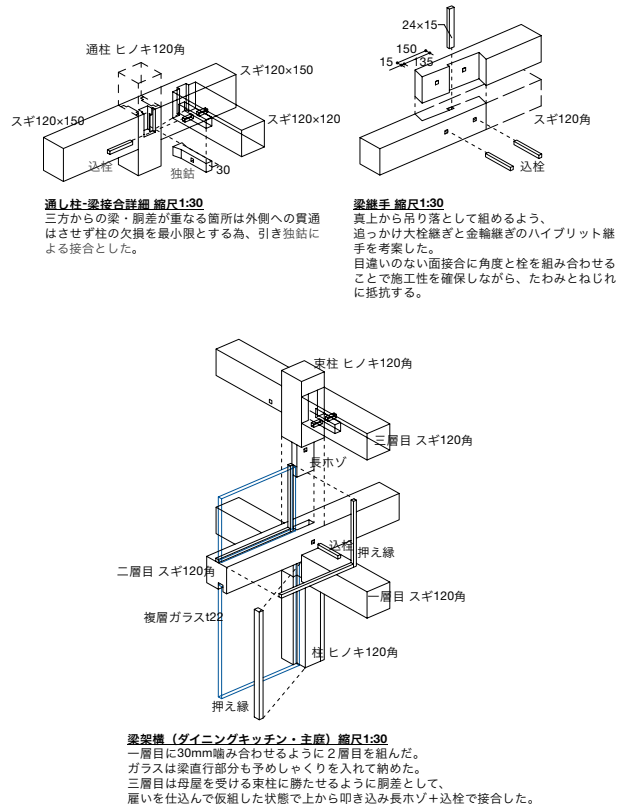


ダイニングとキッチン。ハイサイドからの光が吹抜けを支える格子梁によって拡散され、頭上に柔らかな明かり溜まりをつくる。格子梁の各層は大梁と通し柱、束柱、母屋と交互に組み上げること主構造と一体化させた。主庭の樹木が生きるよう外周壁上部は貫を現した開口とし、風を取り入れる。天井高は梁上で4,127~4,946mm。

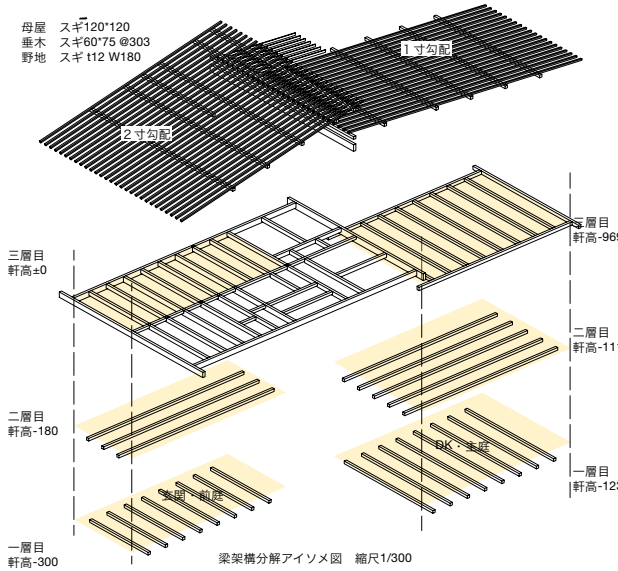


断面パース 縮尺1:100

江南の家

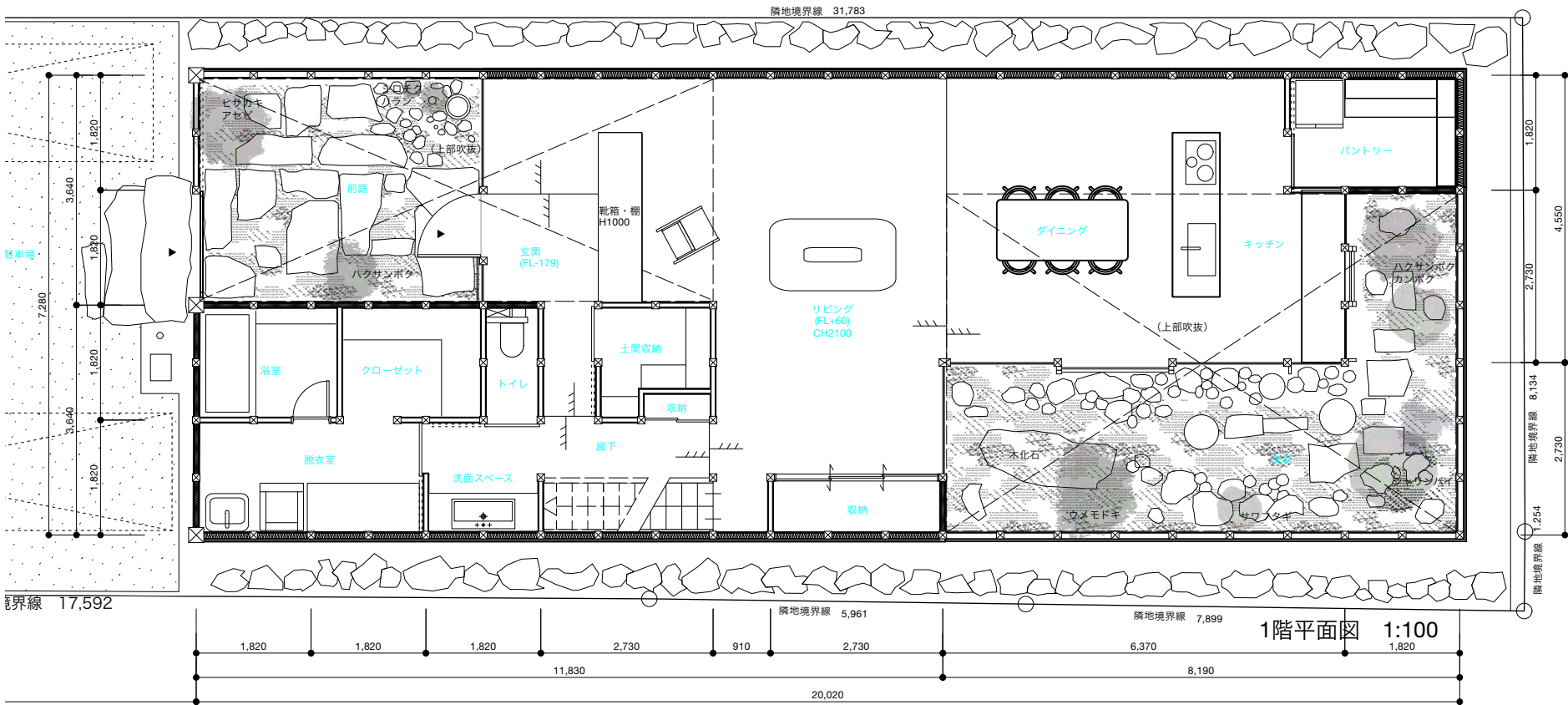
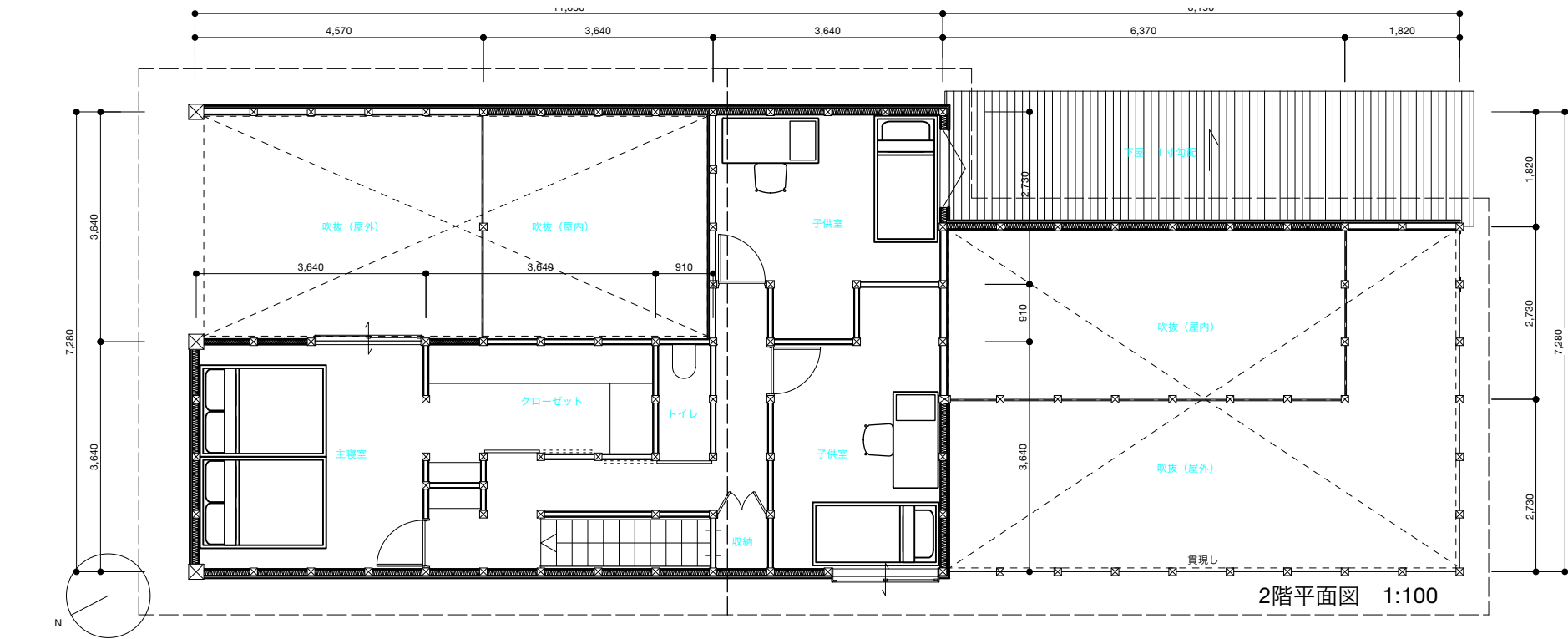


梁架構（玄関・前庭）縮尺1:30
切り欠きによる噛み合わせと、面筋に厚いを入れ、各層に側面から込打ちすることでたわみを防止しながら三層の梁が一体としてねじれに抵抗するようにした。



設計当初、敷地の東隣と南隣は建設予定として空地だった。そこに建つだろう住宅の規模は予想できるものの正確ではない。そこで外部環境に左右されない光の様を自力でつくることにした。北側の道路は交通量が多く、また駐車場を広く取る必要があったため、建物は南側に寄せて配置し、入るか分からない南東からの直射光はアテにすることをやめた。低天井の籠るようなリビングを中心にその南北を吹抜けで挟み、それは建築面積の半分近くに及ぶ大きさをもち、3層の梁を格子状に組むことで荷重分配と水平剛性による主構造の安定化を図った。この格子梁にハイサイドからの天空光が当たり拡散され、柔らかな光と影が頭上に浮遊し、その下の暗がりをもつ落ち着いた居場所とした。目の前にはあるはずの光の存在を認識するためには、反射吸収する何物かが必要だ。大気中のチリなどがそれにあたるが、それを建築スケールまで拡大させるように、構造材にその役割を担わせた。格子梁は、玄関・ダイニングキッチンからそれぞれ前庭・主庭へと連続し、室内と庭は光の具合によって結ばれ、建物全体に変化と一体感を共存させた。

およそ60m³という住宅としては比較的大量の木材を扱うこととなった。製材工程の歩留まりを考慮すると原木換算では100m³を超え、本数にして300本近い樹木からつくられた住宅というわけだ。天然乾燥材は油分を残したまま水分だけを抜くため、構造としての粘りのほか艶や肌触りもよい。一方で建築界の外に出ると乾燥方法による違いどころかその存在さえ認知度は低く、また扱いに技量を要することや、保管スペースの問題から、流通としては下火だ。この先、良材が私たちの手元に届かなくなっては困る。材の出自と特性が設計の可能性を広げるものとなるよう、金物を使わない手刻み木組みの大工技術による木架構として、不易流行を貫く姿勢を示した。



△前庭に立つ。庭と居室を吹抜けとして一体化した。建具、目線高さの靴箱、2階のボリュームによって視界を制限し、奥に進むにつれて景色が変化していく。庭には内部から太陽光を届けることで内外の摂理を反転させ、境界を曖昧にした。

△北側全景。交通量の多い道路沿いの間口9m、奥行31mの南北に長い敷地に建つ。バッファゾーンとなる前庭を設け、門扉により生活の様は後景化するが、上部2間の開口から内外で連続する手刻み木組みによる躯体が表出する。



△主庭と居室の関係。外と内は光の具合によってつながりを持つ。西側上部から入り込む風は南側高さ4mに設置した回転窓から抜く。屋根架かりの環境に合う日陰で育った山採れの樹木を植えた。建主と収集した川石を量み、景石はインドネシアから仕入れた木化石を据え木架構に馴染ませた。引き戸の鴨居敷居は手入れて長く使えるよう楔による細工で取り外し可能とした。



前庭を見下ろす。キッチンからの視線に配置した樹木がそのまま動線を形成する。門扉はヒノキ、玄関扉は黒皮で制作。同ピッチで連続する躯体の規律性を崩すように、地面には石臼やるつば、川石といった丸みのある異素材を用いた。



リビングより玄関を見る。北からの柔らかな光がスギ板の壁の表情をつくる。スギ板は工務店所有林で育成伐採したもの。門扉、玄関扉の開け閉めにより外部との関係を調整する。



左右を吹抜空間で挟まれたリビングの天井高は2,100mm。子供室が納まる上部のボリュームは白土漆喰で下地は木摺り。天井照明は円錐台形の木摺下地を制作し、左官で仕上げ、電球を埋め込んだ。



キッチンから道路方向を見る。真壁のスギ板は玄関側の白太がちからキッチンに向かって赤身がちとなる選別し、材の視点からも奥行きをつかった。



△手刻みの様子。



▽母樹林。



△▽建前

